

大の川の太陽

上

黒岩重吾



黒岩重吾

天の川の太陽

上



中央公論社

天の川の太陽 上

九八〇円

●一九七九

昭和五十四年十月二十日初版発行
昭和五十五年四月一日五版発行

著者 黒岩重吾

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八七七

電話 五六一五九二一

振替 東京二二三四

検印廃止

天の川の太陽
上

西暦六五八年、斉明四年の十一月初旬、大海人皇子は一人で深夜の岩風呂につかっていた。この南紀の湯（白浜温泉）に母斉明、兄である皇太子中大兄皇子、それに一昨年まで恋人であった額田王などと共にやって来たのは、十月中旬だったから、すでに二十日近い滞留にたつた。

湯は熱く、手で身体を拭くと、ぬらつくような感じがする。この時期の南紀の海は波が高く、遠い海鳴りの音と共に、岩床に打ち寄せる波濤の響は、湧き出る温泉の音を消していた。ただ、波濤が碎け、次の波が押し寄せると一瞬の間に、泣くような松籟の呻きが、大海人の胸に

浸みた。大海人はぬらつく湯で何度も身体をこすった。こすると肌が油でも塗ったようにすべるのだ。大海人にはそれが気持ち良かった。

今頃中大兄皇子は額田王と構合っているだろう。ふと未練にも似た思いが胸を掠めたが、大海人はそんな自分の女々しさに腹を立てた。

昨年、まだ十三歳だった嶋野讃良と引換えに額田王を要求して来た兄の生真面目な顔を思い浮べると、矢張り仕方なかった、と思う。

兄の冷酷非情なやり方を、大海人は身近にいて、冷静に観察して来た。兄が生真面目な顔をする時は、本気なのだ。その点、兄と一心同体となって行動している鎌足とは、対照的だった。鎌足は胸に策謀を秘め、重大な決心を打ち明ける時も、柔和な微笑を崩さない。兄と二人切りで話している時はどうかしらないが、大海人に対しては、何時も微笑を絶やさなかった。

兄と鎌足の間に亀裂が入らない限り、大海人は正面切って兄には反抗しない、と心に誓っていたのである。

嶋野讃良は兄の娘である。昨年紀にしたばかりだが、十四歳にしては太柄で肉付きが良く、ふくよかな可愛らしい女であった。ただまだ少女なので飛鳥の屋形に置いて

て来たのだ。

それに兄からは、讃良さちらの姉の大田皇女おおたのひめみこも貰っている。

それだけではない。兄はこれからも、自分の娘をやろうと匂わせた。例の生真面目な顔で……。

あの表情は嘘をいつていない。余程気にしているに違いなかった。それに額田王ぬかたのきみがまだ自分に想いを残しているのは、すれ違った時の艶っぽい視線を見れば分る。

愛情のない形骸を抱いて、何が愉しいのだろう、と大海人は苦笑した。

こんな時、額田王ならどんな歌を詠むだろうか、と大海人は温泉から出ると、岩床に腰を下ろした。

大海人は、したりたり落ちる汗を拭いながら、遠い海鳴りの音に、自分の想いをたくそうと、色々考えてみたが、さっぱり浮んで来ない。

歌といえば、母斉明はこの温泉に来てから、皇孫建王みまこひろのきみをしのんで幾つか歌を詠んだ。

山越えて 海渡るとも おもしろき 今城いまきの中は

忘らゆましじ

水門みなとの 潮うしほのくだり 海うみくだり 後うしろも暗くらに 置きて
か行かむ

愛うつくしき 吾あが若き子を 置きてか行かむ

母といえば、この頃涙もろくなり、何となく老衰の氣配が窺うかがわれる。建王は兄と遠智とち娘との間に出来た皇子だが、生れながらの啞おしであった。

だから、母としては孫に対する不惑ふひんさ故の愛情も強かつたのだろう。それにしても、幾ら兄のすすめにして、瓦葺わづきの小墾田おほりだの宮の建築は、その規模からいって、余りにも巨大な大宮殿だった。

三韓、唐に対する威信を示さなければならぬ、という兄と鎌足の考えで、巨大な宮殿が計画されたのだが、深山幽谷から、その建材を集め、そのために速く運べず、建材の殆どは、朽ち果ててしまった。

しかも板蓋宮いたがきのみやは放火による火災で、母は一時川原宮かわらのみやに移り住まなければならぬ状態だった。

だが母は兄に対して、何一ついわない。

母が大王の位をついだのは、全く兄と鎌足の演出で、政治に口をはさむことは許されないうのは分っている。ただ忠告ぐらいしたら良いと思うが、建王と遊び戯れるだけで、兄達がしていることには無関心だった。

だが兄は、小墾田宮の失敗にこりず岡本に大宮殿を建

てた。古い先の短い母のためだ、と言っているが、如何にも兄らしい、執念の産物である。岡本宮だけなら良いが、多武峰に石垣で囲んだ城塞を造った。その石を運ぶため、香久山から石上山まで渠が掘られ、百艘の船が絶えず運航した。

岡本宮の周辺にも石が運ばれ、それは山城のようだった。

あいつが苦役に民の怨嗟の聲は酷く、うるさい蠅のように飛鳥の地を蔽っていた。

民の声を、大海人は、兄のように無視出来る性格ではなかった。民は兄だけではなく、当然、母を恨む。

兄がこのような大仕事を完遂したのは、唐の協力を得て力づき百済を圧迫している新羅を、仮想敵国、と考えているからだ。

かねてから大海人は、孝徳崩御以来の新羅を敵視するようになった兄の対外政策には批判的だった。

それは属国の形にせよ、新羅が唐と結びついてしまったからである。つまり新羅を敵視することは、唐を敵視することになるからだ。

それと六四七年倭国に来た新羅の王族、金春秋の人物柄に対する印象が強烈だったからである。

金春秋が倭国に来たのは六四七年、大化のクーデターの二年後だった。

何故倭国に来たか、大海人は詳しい事情は知らない。だが主目的は倭国のクーデターの内容を知るためと、新羅を倭国の貴族達によく理解させ、倭国の協力を得るためだった。

当時上臣だった金春秋は、六四二年百済に対する劣勢を挽回すべく高句麗の協力を得るため、高句麗に行き、人質になりながらも脱出帰国した勇敢な男である。倭国に来て後、唐に渡り、その後、六五四年新羅の武烈王になったが、一時は唐の属国の形で我慢し、唐と手を結び、遂に朝鮮統一の道を開いた偉大な人物である。

金春秋は新羅の真智王の孫で、花郎と呼ばれる新貴族達に人気があり、新しい時の流れに対して、卓越した眼を持っていた。

当時、大海人は十六歳だったし、元来寡黙なので金春秋の爽やかな談話に聞き入る方だったが、その風貌や動作なども何故か強烈な印象に残っていた。兄や、鎌足と比較すると、一廻りスケールの大きい人物のような気がする。

そして、そういう人物が指導している新羅を、やたら

に敵国視するのは危険だ、と兼々思っていたのだ。

大海人もすでに二十八歳になっていた。

もう一度湯につかつて部屋に戻ろう、と思った時、大海人は早馬が駆けて来る音を聞いた。紀伊田辺から馬と共に船で来たのか、山間の道なき道を駆けて来たのか、それは分らない。

それにしても午後十一時を過ぎたこの時刻に早馬とはおかしい、と大海人は思った。

余程の重大事件が起らなければ、早馬など来る筈はない。大海人達は紀伊田辺から船に乗りこの温泉に来たのである。

早馬は二頭だった。

「どうしたことじゃ、早馬じゃな」

大海人は温泉の岩床に蓆を敷き、脱いだ衣服の傍で坐っている舎人にいった。

「はあ、そのよう御座居ます」

「様子を見て参れ、吾は部屋に戻っている」

こういう場合の大海人の動作は機敏だった。素早く衣服を着ると、大田皇女が眠っている部屋に戻った。この温泉は大王や王族用のもので、温泉の傍に高床式の屋形が造られていた。大海人が屋形に通じる渡り廊下を歩い

ていると、さっきの舎人が戻って来た。

「どうやら、蘇我赤兄殿が寄越された早馬のよう御座居ます、皇太子様に御報告すべき、重大事件が勃発したとか……」

「赤兄か……」

大海人は吐き出すようにいった。

余り顔には出なかったが、大海人は何時も兄に阿諛追従し、鎌足の機嫌ばかり取っている赤兄に、好感を抱いていなかった。

蘇我赤兄は馬子の孫で、雄当の子である。六四五年のクーデターの時、兄や鎌足側についた石川麻呂の兄弟にあたると。

兄弟だが人間の器となると、石川麻呂とは雲泥の相違があった。

大海人はその舎人に、眠っている舎人達全部を起すように命じた。

「良いか、刀を離さず横たわっておれ、皆、眠ったふりをしてるのじゃ、分ったな、起きて騒ぎたてるではないぞ」

異母兄古人皇子が吉野の宮滝の離宮で、謀反の罪により僅か四十人の兵で殺されて以来、大海人は兄に對し、

心から信頼できないものを感じていた。あれが兄と鎌足の策略なのははっきりしている。

それにしても、重臣達の精神の腐敗ぶりは酷い。だから大海人は媚を売って来る重臣がいても心を許さなかつたし、皆、平等に付合っていたのだ。何時、自分が古人皇子の立場に立たされるか分らない。

吉備笠^{きびのかさ}臣^{おみ}垂^{たる}が古人大兄皇子^{ふるひとのおおえ}を裏切り、兄に密告して謀反がばれたということになっているが、噴飯ものである。げんに、謀反に加担した物部朴井連^{ものべのくらしのむらじのつら}椎子^{すゐこ}、東漢書直麻呂^{あづまのあたしまろ}、朴市秦造^{くしきのあきらみぞう}田来津^{たきつ}は罰せられていない。ことに朴市秦造田来津の如きは後に小山下^{しょうやまのした}になり、百濟救援^{ひやくさいのえん}の将として出陣しているのだ。

日向^{ひなた}が讒言^{ざんげん}した石川麻呂の謀反だつて同じである。兄は日向の密告が嘘であるのを知りながら、石川麻呂を攻め、石川麻呂は遂に桜井の山田寺で惨殺されてしまった。兄が蘇我蝦夷^{そがえみ}、入鹿^{いんろ}を斃^たせたのは、石川麻呂のおかげではないか。石川麻呂が兄に味方したので蘇我氏は分裂し、東漢氏は甘藷丘^{あましのおか}に集った兵を解散させたのである。

石川麻呂こそ兄の盟友である筈だ。

あの時は叔父孝徳も石川麻呂の追討に反対し、そのため追討軍が遅れた程だが、結局、兄の圧力に屈してしま

った。屈せざるを得ない程、兄の力は強かったのである。その叔父も結局兄と鎌足に見捨てられ、愛する間人皇后^{まねみくさうご}まで奪われてしまった。叔父の死も兄によつて放たれた刺客に殺された可能性が強い。

もし石川麻呂がいなかったなら、今頃は蘇我王朝の時代で、兄など飛鳥の片隅で小さくなって住んでいるか、とつくに殺されているか、どちらかだろう。

大海人は人間性が豊かな石川麻呂が好きだった。それだけに古人皇子の事件よりも、受けたショックは酷かったのだ。

もし日向の讒言を兄が本当に信じて石川麻呂を討つたのなら、嘘をついた日向に対し、流刑などという生易しい刑では済まざなかつただろう。それこそ、首を捻じ、日向を切り刻んで惨殺したに違いない。それが兄の性格である。

しかも兄は石川麻呂の娘^{むすめ}、造媛^{みづこひめ}と遠智娘^{おちのいらつめ}を妃にしている。造媛は婚礼の夜日向が奪うという事件が起り、復讐的な意味で妃にされ、憐れにもその存在すら忘れられそうな形だけの妃だったが、遠智娘はそうではない。大海人の妃大田皇女と讃良皇女^{さだらみみくさうご}、それに建王を生んでいる。自分の権力、地位を守る為には、血縁関係など無視し、

流血の惨が繰り返される時代だったが、中大兄皇子の血は、余りにも冷酷だった。

大海人は兄の部屋に行こうかどうか迷ったが、そ知らぬ顔をしておいの方が良いと思い、刀を傍に置いて眠ることにした。構合の快い疲れで大田皇女は熟睡している。

戸もない広い部屋なので、暖かい南紀も十一月の初旬になると、深夜はかなり冷える。大田皇女の顔を眺めた大海人は、まだ少女の面影を残している讃良を一瞬思い浮べた。

兄の部屋から話し声が聞えて来るようだ。

また謀反をでっちあげたのではないか、と大海人は思った。石川麻呂が滅ぼされて以来、赤兄は石川麻呂の地位を得ようとして、必死であった。

兄や鎌足に阿諛追従するだけではなく、大海人に對しても、何かと機嫌を取って来る。

この春自分の娘、大薨娘を妃にして欲しい、と打診して来たばかりだ。彼女はまだ幼女だった。

猿め、と大海人は呟いた。

岩風呂につかっている時よりも、波濤の音は凄しい。もし謀反人をでっちあげたとすると、その謀反人は今の

ところ有間皇子以外にはなかった。皇子の父孝徳が、どんな気持で死んだか、彼は痛い程知っている筈だ。

兄や鎌足の眼が、自分に向けられているのを感じて、愚者をよそおっているらしいが、そういうやり方が、兄や鎌足の疑惑を一層深めるだけなのが、分らないのだから。

そういえば、有間皇子はまだ十九歳だった。

だが果して早馬の使者が何を告げて来たか、はつきりしたところは分らない。

大海人は遠い海鳴りの音と波濤の響を子守唄のように聞き入りながら眠りについた。

大海人が有間皇子の謀反を聞いたのは翌朝だった。

兄が大海人を呼びに来たのである。

食卓には海の珍味が並べられている。

伊勢蝦、鯛、鮑の刺身、それに焼魚など、この南紀は海の幸にめぐまれていた。

飛鳥に居ても調貢される魚は食べられるが、総て干魚で、刺身などは食べられない。鯛などは何ととっても、新鮮なのが美味である。鯖や鰯の焼きたての旨さは格別だった。

舍人達は次の間に控えており、額田王の姿も見えない。

「昨夜、早馬の音を聞いただろう」

と兄は生真面目な顔でいった。

「ええ丁度湯につかっていた時でした、そうですか、あれは矢張り早馬でしたか」

「有間皇子が謀反をたくらんだ、赤兄が知らせて来た、狂人をよそおうていたが、矢張り謀反を隠すためじゃ、馬鹿な奴だ」

「謀反の事実は、はっきりしているんでしょうか？」

「勿論じゃ、赤兄の使者の話によると、加担者は塩屋連鯛魚、守君大石、坂合部連兼達らしい、赤兄の家に行つて計画を練つたということじゃ、何でも、宮を焼き、五百の兵でここを攻め、水軍を使って淡路とここの間を押えるという作戦らしい、十九にしては、なかなか考えた」

生真面目な兄の顔に、一瞬、小馬鹿にしたような薄笑いが浮んだ。

「赤兄は、どうしてそれを……」

「吾は、留守中のことは総て鎌足にまかせてあった、有間に不穩の動きが見えたので、赤兄が罾を掛けた、それに掛つた、というわけじゃ」

兄は素晴らしいながら刺身の鯛に視線を向けた。この鯛

のように釣られた、と兄の眼はいつていた。

兄が、自分の口から、こんなにはつきり、罾を掛けた、と告げたのは初めてだった。

古人皇子以来、危険な人物を総て抹殺し、最後に残つたのが有間皇子だけである。

その最後の危険分子をやつと排除したことで、兄も気がゆるんだのだらう。

この鯛はその祝いであった。

食膳の鯛は、兄の眼には有間皇子と重なつて映つてゐるに違ひなかつた。

だが兄は氣を許したとはいへ、自分が罾を掛けたとはいわなかつた。留守中の総ては鎌足にまかせてゐるから、罾を仕掛けたのは自分ではなく、鎌足だ、としらを切つてゐる。

「ひょっとしたら、赤兄の心底にも、謀反の氣持があつたのではないでしようか」

兄は首を横に振り、含み笑いを洩らした。

赤兄はそんな馬鹿な男ではない、と兄の顔はいつていた。

「それで、有間皇子は、今何処に？」

「生駒の自宅で赤兄が捕えた、吾は直ぐここに連れて来

るように命じた、明後日には到着するだろう、一応は、謀反が事実かどうか訊問せねばなるまい」

他の部屋から、女人達の笑い声が聞えて来た。

昨日と異なり、今日は雲もなく暖かい日であった。秋の朝陽が紺碧の海にまぶしく燦^{きら}いている。多分、今朝の母は機嫌が良いのだろう。この頃の母は、一寸したこと機嫌が良くなったり悪くなったりする。

漁師達が小船を漕いで沖に出ている。

「有間皇子は否定するでしょう、しかし赤兄達が謀議に加わっていたとすると」

「ああ、どうしようもないのう、大海人^{おほしなま}、さっき、漁師達が獲って来たばかりの刺身じゃ、この季節の鯛は、身が締って旨いぞ」

兄は何事もなかったように、海の幸を食べ始めた。大海人も、兄にすすめられるままに食べた。兄は確かに変わった。血で血を洗う政争の中をぐり抜けて来たせいだろうか。

眼付きが鋭くなり、笑っても、心から笑っているような感じがしない。

「なあ大海人、吾が何時もいっているように、重臣達のこと聞いていて政治は出来ぬ、唐のように、大王

が全権力を握っておらねば、いざという時に国は守れない、吾が大王の位についた時こそ、倭国は大王の下に一体となるのじゃ、母も老いた、その時期も近いだろうが、その時に吾の右腕になってくれよ、その時、吾は大王という名を天皇と変えようと思っておる」

大海人は黙って頭を下げた。

兄の生真面目な顔を見て、大海人は兄が本気でいっているのが良く分った。

兄が手を叩き采女^{うねめ}を呼んだ。兄は采女を傍に坐らせると金銅の酒杯を手にし、酒を注がせた。酒は飛鳥から持ってきた清酒であった。

食事を終え、自分の部屋に戻った大海人は解放感を覚えた。兄と二人切りで話し合うと、何処か違和感を覚えてならない。

それは兄が歩いて来た血生臭い人生と、兄と違っておおらかに生きて来た環境の違いのせいもあるかもしれないかった。

妃の大田皇女は、女官に取り巻かれて化粧している。讚良^{あきら}の姉の大田皇女も漸く十六になったばかりだが、もう匂うような女の色香が滲み出て来ていた。

「今日は暖かそうだから、久し振りに海辺に行ってみよう

う、と思っっていますの」

「ああ、そうすれば良い、吾も海に出てみよう」

有間皇子の謀反の件を、話す気にはなれなかった。

大海人は二人の舎人を連れて白浜の海岸に出た。真白い砂を敷きつめたこの海岸は何時見ても美しい。大海人は緑の松が生い茂っている東の方に大股に歩いて行った。松林の先は懸崖で、崖には灌木や奇妙に歪んだ松が斜めに生えている。

大海人は身長百七十糎、肩幅は広く頑丈な身体だった。兄よりも一廻り大きい。

大海人の脳裡に、仏教に熱心だった叔父孝徳の予らしく、才たけた白哲の青年の顔が浮んだ。白浜に来る三月程前、阿倍比羅夫が征伐した東国の蝦夷が二百人朝貢して来た。

兄や鎌足は喜んで彼等を迎え饗宴をもよおし、淳足の柵の蝦夷に位一階を授けた。

軍事の將軍として、阿倍比羅夫の実力は群を抜いていた。

その饗宴の席で有間皇子に会ったが、何故か影が薄く隅の方で小さくなっていた。

大体、東国の蝦夷が屈したのは阿倍比羅夫の力であり、

比羅夫と縁戚の關係に当る有間皇子は、この時はもっと大きな顔が出来る筈だった。それなのに、隅の方について目立たないようにつとめていたのは、すでに自分の身に危険を感じていたせいではないだろうか。

それよりも不思議なのは、当然その饗宴の席に連なるべき阿倍比羅夫は、軍勢を率いてまだ東国にいることだった。どうもその辺に、兄と鎌足の深謀が感じられる。

有間皇子は孝徳と小足媛の間に生れたが、小足媛の父は阿倍倉梯麻呂である。

つまり比羅夫は阿倍氏の一族で、もし有間皇子に援護者がいるとすると、それは阿倍比羅夫だけであつたのだ。今は、衆目が実力第一と見ている戦略家の比羅夫を、東国征伐に派遣しているような、のんびりしている時勢ではなかった。

しかも比羅夫は昨年、遠征に出たきり、一度も帰還していないのだ。

すでに金春秋は武烈王になる前から、唐と一体化の方針を取り、年号も唐にならい、風俗なども唐風に改め、倭国に対して優越的な立場をとっている。兄が、民の怨嗟の声にも拘らず石の山城を築いたりしたのも、新羅の圧力を、ひしひしと感じ取っているからである。

現実に新羅の要請で、唐の高宗は三年前から、高句麗征討の軍を發し、激戦を続けていた。今のところ新羅は積極的に高句麗を攻めていないが、深く考えると、百済に全面的な戦闘を開始する為の力を蓄えているのかもしれない。

その眼に見えない不気味さは、百済の使者達の口から兄や鎌足に伝えられている。先を見るに敏な兄や鎌足が、そんな時期に、阿倍比羅夫を東国に派遣したままでいるのは、どう考えてもおかしかった。

昨年、有間皇子は、病氣を理由にこの南紀の温泉に来ているが、考えてみると、あれは、阿倍比羅夫が東国に遠征した直後だった。

有間皇子は、もうその時、自分の運命を予感したのではないか。

多分、今、自分が歩いている砂浜を物思いにふけりながら歩いたに違いない。

大海人^{おしあま}から見れば、脆弱^{ぜいじやく}といつて良い位のまだ少年の面影を宿した男であった。

憐れみの思いが大海人の胸を掠^{かす}めた。

波打際でふと立停ると、後からついて来ている二人の舎人^{しやにん}が、美濃の言葉で盛んに喋^{しゃべ}っている。

何を話し合っているのか、大海人にはさっぱり分らなかった。飛鳥^{あすか}では、百済語^{くだ}、高句麗語^{かうこり}、新羅語^{しんら}を混ぜ合わせたような倭国語が話されているが、少し地方に行くと、言葉が通じなくなる。地方だけではなく、飛鳥でも、倭国語以外に、貴族、重臣やその子弟達は、百済語、新羅語、高句麗語を知っておらねばならない。飛鳥には三韓から来た渡来人の子孫が多いので、皆勉強し、どの国の言葉に対しても、余り不自由はなかった。

分らない場合は文字で書く。これは漢字が総てであった。だから言葉の通じない地方の郡司などと話し合う場合は、言葉以外に、漢字と手真似で意志の疎通を計る。

大海人は振り返ると、微笑を浮べて訊いた。
「何を喋っておるのじゃ？」

舎人達はお互いのお喋りをやめると、直立し、海の美しさについて話し合っていた、と告げた。

美濃の国には湖はあるが海はないので、こうして大海原を見ると、自然の美しさ、偉大さに魅せられてしまうというのだった。

「一体、この海の彼方には、どんな国があり、どんな人が住んでいるのでしょうか？」

そう訊いた舎人は美濃の豪族の息子だった。好奇心に溢れた眼を見開いて大海人を見詰めた。

大海人にもそれは分らない。

だが少年時代の一時期、尾張の海辺で過した大海人にとって、海は懐しい故郷であった。

十一月なのに裸の漁師が海にもぐっている。尾張の国でも、漁師がもぐって貝など totte いた。

海女がもぐるようになったのはずっと後である。

「そうじゃな、この東の海の向うにも、大唐のような国があるかも知れぬ、唐といえ、一度長安の都に行つてみたいものじゃ」

「眼も眩む程、美しい宮殿が建ち並んでいる都だそうです、ね、女人達の服装も、倭国とは全く違ふとか、伝え聞くところでは、髪をこのように上げて結っているとか、新羅国では唐の服装を取り入れて、華やかな衣服らしいですが」

舎人の一人は結髪の真似をした。もう一人の舎人が、大海人に分らぬ言葉でからかったらしく、髪をあげていた豪族の息子は、顔を赧らめて怒った。

「何をいったのじゃ」

と大海人は微笑した。

「良く似合う、女になれ、と不屈きなことを申しました」
大海人は哄笑したが、坂道を白浜海岸の方に下りて来る女人達の一群を見付けた。

どうやら母と女人達の一行らしい。

大海人はその女人達の中に額田王の姿を見たような気がした。大海人は舎人達をうながし、反対側の山の方に歩いて行った。

「唐の女人の髪は結髪というらしいが、倭国の女人で、そういう髪が一番似合うのは、誰だろうか？」

これは質問でなく、思わず口から出た言葉だった。舎人達の返答を待つまでもない。

優雅で光り輝くような気品を持った額田王以外なかった。舎人達は、また美濃の言葉で話し合っていたが、二人の女人の名をあげた。

「それはいうまでもなく、大田皇女様と、額田王様でしょう」

多分舎人達は、額田王一人の名をあげたかったのだが、大海人の心中を察し、大田皇女の名もあげたに違いなかった。

突然、潮騒のように大海人の血が騒いだ。

吾はまだまだ未練を抱いている。だがこの未練だけは、

どうしても断ち切らねばならない。大海人は海岸の石を拾うと、思い切り海に向って投げた。大海人は肩幅が広く腕が長い。石は弧を描いて驚く程遠くに飛んだ。

二人の舍人は感嘆の叫び声をあげた。感情を隠さない天真爛漫な青年達である。

大海人が、今放った石を取って来い、といえは取りに行くだらう。だが美濃で育った舍人達は泳ぎが旨くない。

「そち達も一つ投げてみる」

二人の舍人達は大きな気合をかけて投げたが、二人共大海人の石が落ちた場所から、二十米ぐらい手前に落ちた。

舍人達の声で、女人達は大海人の方を眺めた。大勢の女人達の視線の中に、秋の冴えた陽を浴びて爽やかに燦く瞳を、大海人ははつきり感じ取ることが出来た。

もし唐の女人の髪が、倭国でも許されることになったら、真先に唐風に結うのは、間違ひなく額田王であろう。

額田王はそういう女なのである。

額田王は鏡王の娘で、鏡の里には天日槍（天之日矛）の伝説がある。

その場所は近江富士と呼ばれる三上山と、傍の鏡山の近くで、琵琶湖から余り離れていない。大海人も額田王

と愛し合っていた頃に行つたが、風光明媚な地であつた。

天日槍の伝説は、古事記と日本書紀ではかなり違ふ。書紀では、新羅国の王子が、倭国に聖君がいると知って、やって来るように書かれている。明らかに作爲的に倭国の威力を強調している。

その点、古事記の方が面白い。

古事記によると、新羅国に一つの沼があつて、この沼の傍に賤しい女が昼寝をしていた。ところが、太陽が虹のように輝いて彼女の女陰を照らした。それを見ていた賤しい夫が不思議に思つて彼女の行動を観察した。

すると彼女は赤い玉を生んだ。夫は妻に頼んで玉を取り腰につけた。

彼が百姓達の食物を一匹の牛に乗せて山谷の田に行くと、新羅国の王子、天之日矛に会つた。天之日矛は、何故飲水や食物を牛に負わせて山谷に入るのか、お前は牛を殺して食べる積りだらう、といつて牢屋に入れようとした。夫は理由を述べたが天之日矛は許さない。そこで仕方なく、腰の玉を渡して許して貰つた。

さて天之日矛が玉を持ち帰つて床に置くと、その玉は